

『極東新聞』と越川芳麿

— 一地方新聞から見る昭和期の銚子 —

水谷 悟

I はじめに

『極東新聞』は昭和5年(1930)1月から昭和15年(1940)10月に至るまで海上郡西銚子町本城(現在の銚子市本城町)において発刊されたタブロイド版の地方新聞である¹⁾。同紙の歩みは、まさしく昭和恐慌、満州事変、五・一五事件などの政治的・経済的な激動が相次ぐ1930年代とともにあった²⁾。世界恐慌に端を発する経済的な危機状況の発生は、全世界的な規模における国家再建の動きを引き起こし、その余波は昭和期の日本にも及んでいた。国家の再編が国民のエネルギーを総動員する形で企図され、より一層の中央集権化が推進されるに伴い、政府による思想弾圧・言論統制も厳しさを増して行くのであった。

中央ジャーナリズムの多くは、迅速かつ正確な情報の伝達に経営の重点を置き換えるなかで、さまざまな抵抗を試みながらも、政府の方針に従うことを余儀なくされる³⁾。また、全国各地の地方新聞も、経営基盤の脆弱、既成政党や政治勢力との結びつき、人材不足などのゆえに、同調・追従の道を辿ることとなる⁴⁾。

このような時代状況にあって、『極東新聞』ならびに主筆越川芳麿(1906～1982)は銚子の地でいかなる言論を展開したのであろうか。本稿の課題は、『極東新聞』を取り上げ、書誌学的な分析のもと、記事内容を検討することにより、同紙のメディアとしての機能と広がり、その言論の特質を把握していくことに置かれる。これは『極東新聞』と越川芳麿における一貫した「批判力」の時代的意義をさぐっていくための前提作業であり、地域に根差した言論の存在を示すことで、戦前期の地方ジャーナリズムを捉え直す視座を獲得する

こととなろう。そして、それは同時に、『極東新聞』という一地方新聞を介して昭和戦前期における銚子の姿を照射する試みである。

II 『極東新聞』の創刊

『極東新聞』の分析を行なっていくに当たり、まず第一に、発行者兼主筆である越川芳麿がいかなる状況から同紙を創刊するに至ったのか、その経緯を見ていく必要がある。

越川芳麿は、明治39年(1906)6月9日、千葉県海上郡西銚子町本城において、越川子之助の次男として生まれた⁵⁾。越川家は代々この地で「三郎兵衛」という屋号を継ぐ農家であったが、父子之助は次男のために家業を継がず、下駄屋を経営していた。あまり家が裕福ではなかったのか、芳麿は大正9年(1920)3月に西銚子高等小学校を卒業した後、浜口儀兵衛商店(現在のヤマサ醤油株式会社)に就職しながらも、郵便配達員や機関工を兼ね、生計を立てたという。

小説家になることを夢見る「文学青年」であった彼は、社員として工場で働かたわら、大正15年(1926)4月に公正会により開設された夜間学校「公正学院」に入学する。公正会は、大正14年4月、浜口儀兵衛商店の第10代当主浜口儀兵衛(梧洞)が郷土銚子への報恩として私財を投じ、社会教育事業を目的として設立した財団法人で、拠点である公正会館には、学院のほかに図書館および講演会や音楽会を行なう施設が併置されていた⁶⁾。当学院は、勤労青少年を対象に、本科2年・高等科1年の修業年限で「一般の中学校と同程度」の教育を施し、「経済的な理由で、昼間の中等学校に進学することのできない向上心に燃える

青少年にとっては大きな救いとなった」というから、芳麿もそうした1人であったことは想像に難くない。授業内容も経済・商業・簿記から修養・講読・作文に至るまで幅広く、読書教育に力を注いでいたという。「社会的正義」を意味する「公正」という学院名のもと、その教育と雰囲気は彼に与えた影響は大きいものであっただろう。在学時の芳麿の様子については、当時、常任教師として漢文を担当していた越川清の回想がその一端を伝えてくれる。

その頃の生徒に白セキ長身の美少年がいた。越川芳麿君がそれであった。名前前のそのように貴族的な面立ちで接遇も亦上品さがあつた。文学的な才能に恵まれて、特に短歌をよくし、好んで口語歌による生活歌や、燃えるような相聞歌をあけっぱなしに発表されて少しも嫌味を感じなかった⁷⁾。

これが『東日本新聞』創刊35周年記念号に寄せられた回想であるという事実を差し引いても、そこに「短歌をよくし」、「生活歌」に「労働の苦難」や「革新的な思想」を込め、「燃えるような相聞歌」をもって恋愛中の苦悩を「あけっぱなしに発表」する「文学青年」芳麿の姿が窺い知れるだけで十分である。昔日の師に「極めて率直に批評を乞はれて教師の私は戸惑いながらも、楽しみにしていたことを未だに覚えている」と言わしめる彼の文学に込めた情熱は到底夜間学校のなかだけで充足されるものではなかった。

昭和3年(1928)、芳麿は篠崎万亀江(信山)の主宰する『銚子評論』に短編小説を応募したのを契機とし、同誌の記者となる⁸⁾。「同社の青年記者」として「生れて初めて背広を着用、「記者」といっても、記事を書いたり、広告や購読料を集める仕事をやった」という経験は後の新聞発行において生かされていく⁹⁾。またその一方で、芳麿は詩歌の創作にも熱心であった。昭和4年に自ら「極東詩人会」なるものを結成し、文芸誌『極東詩人』を創刊して詩作に励み、さらには岩井弘行

の主宰する「銚子短歌会」にも所属し、短歌の吟詠に当たっていたのである¹⁰⁾。そして、ここにおいて彼は、その後の道程を決定づける2人の先輩と出会うこととなるのであった。

昭和5年(1930)1月5日、芳麿は『極東新聞』と題する地方新聞を創刊した¹¹⁾。「極東」とは、まさしく日本の最東端に位置する銚子を象徴すると同時に、世界における日本の位置を示す言葉であったと推察される。しかし、残念ながら、同紙は、創刊号はおろか、初期約4年間分が残存しておらず、最も年代の古いもので昭和7年9月26日発行の号外(第1図)、号数入りの本紙に至っては昭和9年1月25日発行の第49号以降しか現存しないのである¹²⁾。そこで本稿では、昭和初期の千葉県内における新聞の発行状況を踏まえ、回想記事や越川家所蔵の文書に基づき『極東新聞』の創刊当時を跡付けていくこととしたい。



第1図 『極東新聞』号外(昭和7年9月26日発行)
(越川行雄氏所蔵)

大正期の「デモクラシー運動」において指導的な役割を担った新聞ジャーナリズムは、第一次世界大戦による好況、関東大震災の発生を経て、設備の一新を図り、営利本位の経営に移行しつつあった。企業的新聞への転換に伴い、新聞の紙面作りは従来の政治批判中心から「公正」なニュースの供給、文芸・スポーツ・大衆娯楽などに重きが置かれるようになり、各社販売競争が地方版の設置とともに激化した。こうした動向に隣接県千葉は大きな打撃を被った。大正末年に千葉市に支局通信部を設置していた中央紙は『東京朝日新聞』を筆頭に11を数え、発行部数において地元紙を圧倒していたのである。

千葉県下の新聞に目を向けると、政友会系の『千葉毎日新聞』と憲政会・護憲派の『房総日日新聞』が、大正13年（1924）の第二次護憲運動に際して対立の様相を呈していたが、『房総日日』廃刊の後、しばらくは『千葉毎日』の黄金時代が続いた¹³⁾。昭和3年（1928）2月に『房総日日』が復活したのを皮切りに、『房総毎日』『千葉日日』『日刊千葉』などが発刊され、各紙ともに政党機関紙的な傾向を脱し、公正な立場から言論を発していくことを試みる。だが、満州事変勃発以降、言論の統制がより一層強化されると、次第に国家主義的な色彩を濃くしていった。

このようななかで銚子市内に本拠を置いた新聞が発刊されるのは昭和年代に入ってから、『極東新聞』を除けば、『大衆日報』（越川亥之助）、『日刊魁新聞』（伊藤利・明石清三）、『銚子毎日新聞』（田中住一）といずれも市制施行以降の創刊である¹⁴⁾。それまでは『房総日日』『銚子版』のように附録「地方版」の一つにすぎなかった。ここにおいて確認できることは2点ある。一つは、『極東新聞』が銚子市内に本拠を置く地元紙として先駆的な存在であること。もう一つは、同紙の紙面作りおよび経営方針が時代の趨勢と正反対であること。これらは銚子における同紙の存在とインパクトの大きさを知る上で、欠くことのできない事実であり、その言論の特質を規定するものであったと思われる。

では、『極東新聞』の創刊の経緯はどのようなものであったのか。まずは芳麿が戦後、創刊35周年記念として執筆をはじめ、以来、約5年間97回にわたり連載を続けた回顧録を見ていこう。「銚子評論記者を一年程やっている、S、Aという二人の友人が、私に「独立して新聞をやれ」とそそのかした。この二人は、私より三～四年年長の、私にとっては、思想的にも、文学的にも大先輩であった¹⁵⁾」。上述した芳麿の道程を決定づけた「二人の先輩」こそ、新聞の発刊を勧めた「S」と「A」、すなわち斎藤秀雄と明石清三であった。2人との出会いは「銚子短歌会」に遡るが、実際のところ、『極東新聞』の創刊は芳麿自身よりもむしろ斎藤と明石の側に「思惑」があって進められたことであった。

四十余年前、あなた（越川氏）に会ったのは“銚子短歌会”という歌人の集りが縁であった。同人の旧友明石清三君の紹介で地方新聞の配達をしていた純情で逞しい好青年のあなたを知った。明石君からヤマサ王国といわれている銚子の町をあっといわせるような新聞を創刊したいのだが是非君も手伝ってくれ、発行の責任者は越川君にして、記事の材料は越川君と私が集め、記事は君と二人で暫く書こうではないか、という相談があった¹⁶⁾。

先輩の1人斎藤は、『東日本新聞』創刊40周年に祝辞を寄せて上のように回想している。当時、斎藤は「共産党系の組合に関係して四・一六総検挙の時にアジトで逮捕され、取調べ中に腸結核になり、余命幾ばくもないと診断されて保釈中の身であった」というから、新聞創刊の話を持ちかけた明石ともども、その思想に明確な方向性があったことは疑いない。しかし、その思想性ゆえに、両者ともに新聞の前面に立つことが出来ない。そこで白羽の矢を立てられたのが、労働の苦難を「生活歌」に込めて歌いあげる「純情で逞しい好青年」芳麿だったのである。芳麿自身も「S氏もA氏も、当時としては共に表面に立って新聞を経

営する勇氣はなかった。そこで、私を表面に立て、新聞の使命を果そう、ということになった。—というのが真相であろう¹⁷⁾と回想していることから、『極東新聞』の創刊に至るまでの事情がほぼ確定されたといえるだろう。そこから同紙はいかなる出発を切ったのであろうか。『極東新聞』の届け出書類「東監認甲第参卷四ノ参号 認可証」には以下のような記載がある¹⁸⁾。

- 一、題号 極東新聞
 - 二、記載事項ノ性質 政治、経済、衛生、商事、時事
 - 三、発行人 越川芳麿
 - 四、発行所 千葉県海上郡西銚子町本城百八拾参番地、極東新聞社
 - 五、発行人ノ住所 全所
 - 六、発行ノ定日 毎月壹回、拾五日
- 右出願ノ事項ヲ審査シ昭和五年拾壹月拾五日発行第七号ヨリ第三種郵便物ト為スコトヲ認可ス
昭和五年拾壹月廿五日
東京通信局

『極東新聞』が創刊されたのは昭和5年(1930)1月5日であるが、第三種郵便物として認可されたのは同年11月25日のことであった。注目すべきは「二、記載事項ノ性質」の項である。「政治、経済、衛生、商事、時事」という記載には、厳しい言論統制のもと政治批判が薄れゆく新聞事業の展開のなかで、「政治」「時事」を論じていくという同紙の確固たる意志が表明されている。また「衛生」なども漁業や醤油醸造をおもな生業とする土地柄への対峙の顕れとして興味深い。「記載事項ノ性質」を明確に掲げる同紙の出発は、芳麿自身の回想によれば、次のようであった。

そして昭和五年一月、“極東新聞”を発行した。編集はS・A両氏の指導、カットは絵の上手なS氏がつくり、題字にもカマとハンマーを使用する、といった勇ましい左翼ばりのものであった¹⁹⁾。

斎藤・明石の先導により『極東新聞』は出発した。同紙の象徴として掲げられた「カマとハンマー」は不当な政治権力へと否応なく振り下ろされ、「ヤマサやヒゲタなど、銚子の財ばつは皆筆誅の対象になった」。斎藤も「私達はそこで、先ず醤油王国の殿様ヤマサを当面の相手としてバクロ記事を書きなぐった新聞を発行した」と回想しており、その筆誅の鋭さが「少し凶に当たりすぎて町中は大変な騒ぎ」になり、同紙は「一躍有名」となったのである²⁰⁾。だが、その反響ゆえに、芳麿は「警察はじめ市民から“左翼思想”“赤”のレッテルを貼られ」、「“特高”にマークされ」、「行動を監視され」るようになり、斎藤に至っては地元の暴力団に追われて東京へと逃亡する羽目になったという²¹⁾。

『極東新聞』が創刊間もない時期に先導役を失いながらも、以後、発行を継続しえたのはなぜか。それは主筆越川芳麿の努力のみならず、同紙の存在ならびに言論を支持、援助する人々が少なからず存在していたからにはほかならなかった。

Ⅲ メディアとしての機能と広がり

『極東新聞』はいつ、いかなる形態で、どのような人々を対象として発行されていたのか。書誌学的な分析に基づき同紙のメディアとしての機能と広がりを明らかにしたい(後掲、第1表参照)。

「編集兼印刷発行人」は、創刊当初、「越川芳麿」であったものが、昭和9年(1934)1月25日発行の第49号では「高橋光子」と変更されている。筆禍下獄を経るなかで同紙を存続するために取られた措置であろうか。昭和11年7月20日発行の第97号から「主宰越川芳麿」という記載が加えられてはいるものの、発行人の名義は終刊に至るまで変わることがなかった。

発行所は、昭和8年(1933)2月11日の市制施行に伴い、極東新聞社の住所が「海上郡西銚子町本城一八三番地」から「銚子市本城二丁目一八三番地」へと変更されるが、場所それ自体の移転は見られない。

購読料は、創刊当初、一部10銭であった。当時、昭和恐慌に伴う米価の暴落もあり米一升が約16銭、大工の日銭が約80銭、『東京朝日新聞』が一部6銭、月額1円20銭であったから、一部当たりの値段は決して安いとはいえない。ただし、日刊紙全盛の時代にあつて同紙が月刊ないしは半月刊であることを考慮すると月当たりの値段は安価であったといえる²²⁾。昭和11年(1936)1月25日発行の第86号より一部20銭となるが、この値上げは、軍需インフレによる物価変動に伴う措置というよりも、芳麿の筆禍下獄以来約9ヶ月ぶりの復帰に合わせて経営を建て直すための方策であったと考えられる²³⁾。

同紙の発行日と発行回数および頁数を見てみると、当初、月刊(15日発行)であったものが、別に号外を刷るようになり、さらに昭和9年(1934)1月25日発行の第49号の段階では、半月刊(10日25日発行、このほかに号外)へと発展している。この時期の紙面数は、ほぼ10日発行分が4頁、25日発行分が2頁となっているが、頁数はいずれの時期を対象としても一定とはいえず、情報の多少により臨機応変に4頁と2頁を採用していたというのが妥当であろう。発行回数は、途中、芳麿の筆禍・下獄により妻光子が主筆代理となった時期に月刊となったこともあったが、彼の復帰した昭和11年1月25日の第86号からは再び半月刊(20日25日発行)へと戻り、同年3月30日の第90号において発行日を20日30日と改めて以降は、終刊まで変わらずに半月刊を続けていく。

同紙の販売形態は、売捌所においてではなく、配達と郵送によるものであった。芳麿の回想のなかに「新聞は私がハッピーを着て配り、集金や広告も集めて歩いた。同時に取材も行なった²⁴⁾」という記述があり、主筆自らの足で記事も広告も購読料も集めて歩いた様子が窺える。遠隔地に対しては郵送という手段が採られたのであろう。『極東新聞』の題字下には、購読料「一部10銭」という記載の左隣りに「地方郵共2円」とある²⁵⁾。

では、同紙はどれだけ多くの人々に読まれたのであろうか。メディアとしての機能とその広がり

を把握する上で、同紙の正確な発行部数を調べ、それに基づく読者の分布をおさえることは要件である。第88号(昭和11年2月25日)掲載の「東京新聞紙の市内販売部数」と題する記事には、「銚子駅に到着する斤量其の他の計算によって駅前交番巡査の打診」により、「東京日日新聞 千二百部」「読売新聞 千百部」「東京朝日新聞 九百部」「報知新聞 六百部」「時事新聞 百五十乃至二百部」「国民新聞 百五十部」と東京各紙のおおよその発行部数が記され、「この他本社が取扱っている週刊時局新聞が二百三十部」とあり、参考にはなる²⁶⁾。しかし、残念ながら『極東新聞』自体の発行部数ならびに購読者を想定しようような資史料は現在のところ確認できていない。そこで以下では、同紙を支持、支援した広告ならびに「地方版」の存在に照明を当てていくことにより、メディアとしての機能と広がり把握していくこととする。

発行人、購読料、発行日などとともに、新聞の発行・経営において重要な存在といえるのが広告である。広告主は基本的に同社の支援または協賛者であり、新聞メディアとしての領域を考える上でも看過できない情報源といえる。『極東新聞』には、毎号各面10件前後の広告が掲載されているが、一瞥して気が付くのは、ほかの業種に比べて、病院・薬局・診療所など、医療関係の広告が圧倒的に多いことである。なかでも清川町の秋山内科病院と新生町の岩井病院(耳鼻咽喉科)の両医院の広告はほぼ毎号掲載されており、その存在は同紙にとって大きいものであった²⁷⁾。

秋山内科病院長の秋山寅雄と岩井病院長の岩井弘行は、ともに明治31年(1898)生まれ、大正6年(1917)入学の千葉医学専門学校の同期生であった。秋山は卒業後、同附属病院第二内科に勤め、昭和7年(1932)3月より銚子市清川町で開業医を営み、診断の的確さと患者への分け隔てない応対で市民から信頼を寄せられ、市内の医療関係者からも一目置かれる存在であった。一方、岩井も卒業と同時に、同附属病院耳鼻咽喉科教室に入り、大正15年11月末に銚子市新生町二丁目を開

業、昭和10年には秋山と協力して看護学校を設立するなど、市民衛生の向上に尽力した。また岩井は地域文化の振興にも強い意識を持ち、銚子短歌会の主催者としてその発展に貢献するかたわら、終始一貫、芳齋ならびに『極東新聞』に対して期待と信頼を寄せる支持者の1人であった。

新聞にとって広告の存在が重要なのは、経済的支援という経営上の問題のみならず、その掲載が記事や情報の信頼を保証することによる。同紙が市内でも信望の厚い秋山、岩井の両病院に支援されていたことの意義は大きく、医療関係の広告が多数掲載されている所以であろう。さらに、それは一定の知識水準を持ちながら、地域住民と接する医療関係者の意識のあり方が少なからず同紙の言論および存在に期待と信頼を寄せるものであったことを証左していよう。このほか、おもな広告主としては、醤油会社、弁護士事務所、映画館、旅館、ホテル、酒・菓子・洋服などの地元商店などを挙げることができ、同紙の支持・支援者の存在を考えると重要な手がかりである。

広告料に関しては、当初、1行13字につき11円であったものが、第49号（昭和9年1月25日）の段階では10円、第71号（同年12月25日）からは2円となり、第116号（昭和12年5月20日）には1行12字につき3円に改められた。最も大きな変化は、昭和9年暮れにおける10円から2円への値下げであるが、これは昭和恐慌による物価の下落と不況の悪化を背景とした措置であろう。

広告の存在とともに、あるいは、それ以上に、『極東新聞』のメディアとしての広がりや把握する上で注目されるのが「地方版」の存在である。同紙には第56号（昭和9年2月10日）4面に掲載された「極東水郷版」をはじめとし、複数の地方版が設けられている。「地方」読者が集中している地域に支局を設立し、「地方版」を掲げて記事ならびに情報を提供したと考えれば、これは購読者の所在を示す重要な情報といえる。

「極東水郷版」は、おもに佐原周辺地域を対象とし、隔号で掲載されていたが、芳齋が下獄のため不在の期間には「水郷特輯版」を組んで同紙を

盛り立て、発行の継続・維持に貢献した。第121号（昭和12年7月30日）には「極東水郷版」のほかに、「海上郡山西版」が新設され、それに伴い両支局の所在地と支局長の名前が「極東新聞社潮来町支局 茨城県潮来町 支局長高橋政五郎」「極東新聞社旭町支局 旭町八一二五五 支局長 伊藤竹光」と記されている。ちなみに旭町支局の「海上郡山西版」は初出より11回続けて連載されているが、その後の詳細は不明である。また、昭和13年（1938）2月28日発行の第135号からは「東葛版」が設置される。「支局担当者 金坂徳司」のもと、市川、船橋、行徳、浦安、松戸地方に向けて情報が発信される旨が記されているが、同年4月20日の第138号まで連載されて以降はこれまた不明である。

このように見てくると、「地方版」はおもに佐原や旭、潮来など、鉄道・水運、漁業・商工業の関係で、銚子市内から比較的頻繁に人の移動・転出が見られる地域に設けられていたといえる²⁸⁾。これら「地方版」は、「かうした支局は更に拡大強化し支局網の完成により以って地方新聞の特色を益々發揮してゆく考へである」という芳齋の方針により展開され、いわば銚子在住者と出身者との情報交換の場を提供する役割を果たしていたのである²⁹⁾。

さらに、こうした機能は、銚子出身の在京者に向けても用いられていく。昭和11年（1936）9月30日発行の第101号に設置された「都南評論版」は、やがて同紙が担う銚子在住者と出身在京者との架け橋的役割の嚆矢となる。同号3面中央には、「品川、荏原、目黒を中心に 東京都南評論版を発行 百号記念に本紙中央へ進出」との見出しのもと、その趣旨が「本紙はかねてより東京進出は思念なし居りましたが、漸くその機を得ましたので、いよいよ第百二号より「東京都南評論版」を新設、品川、荏原、目黒を中心として活躍することになりました。読者各位並に東京南部諸士の絶大なる御声援と御鞭撻をお願い致す次第であります」と明示されている³⁰⁾。「都南評論版」は宣言の勢いとは裏腹にその後、第118号（昭和

12年6月20日)まで姿を現さなかったが、同紙のこうした姿勢は、第132号(昭和13年1月20日)における「在京県人版」の新設となって結実し、郷土出身者をめぐるさまざまな特集記事、さらには在京銚子人の会合を生み出す契機を作り出していく³¹⁾。

なかでも特筆されるのは、昭和14年(1939)2月に結成される銚水会の存在であろう。その組織計画が「郷土出身名士のみの銚子人会近く発会式」と報じられたのは、昭和13年11月20日発行の第152号においてである。これに際し、『極東新聞』は、「海上郡銚子市出身若くは縁故者」による紳士的な会合の誕生に期待を寄せ、「郷土発展」と「在京郷党の精神的向上」を期する姿勢を評価し、その結成に尽力する青木元次郎らの活動ならびに会員の参加状況を詳細に伝えている³²⁾。

昭和14年(1939)1月19日正午、東京虎ノ門の晩翠軒において発会人会が開催された。松井簡治、岡田幸三郎、岩瀬徳三郎、鈴木文史朗、滑川真平、仲内憲治の6名が、臼井大翼、浅川貞治、青木元次郎、川村芳次らの委任を受け、協議の末、「郷土愛を中心とした純然たる社交機関」として「銚水会」という名称を採用、春秋2回の例会の開催(銚子と東京交互)をはじめ、入会規定、発会時期、世話人任命、会費設定、会報発行などを取り決めた。この決定にもとづき滑川・青木が作成した趣旨書ならびに会則は、郷土関係者に送られ、大きな反響を呼び、翌2月20日、正式な発会を迎えたのである³³⁾。

第159号(昭和14年2月28日)「在京千葉県人版」は、銚水会の発会式の盛況ぶりを伝えるとともに、「アート紙豪華版の会報近く発行」と予告。同会は、この時点ですでに会員総計56名に及び、以後、会報の発行、銚子における会合の開催を通じて、規模拡大を企図し、例会における松井簡治、臼井大翼、内田勝平らの講演を企画するなど、在京県人とともに郷土の発展に尽くした³⁴⁾。これに伴い、同紙には会員名士からの寄稿が数多く掲げられ、第168号(昭和14年2月28日)では「銚子を語る座談会」と題する特集記事が生まれ

ている。同会発行の『銚水会報』は極東新聞社で印刷され、芳蔭自身最晩年までその存在を郷土銚子の誇りとしていたという³⁵⁾(第2図)。同会報巻末の会員名簿は当時の在京および地元名士の経歴その他を詳細に記した貴重な資料である。

また、この時期、千葉県出身の在京実業家により結成された三水会をはじめ、銚商会や潮光会などの会合が計画、組織され、頻繁に活動を行っていた。銚水会ならびに三水会の両組織は、「翼賛」体制の進行のもと、同紙が終刊に追い込まれたとき、その後継雑誌『極東』の発行を支援する存在となるのであった。

以上、『極東新聞』における広告と「地方版」の設置について検討を加えてきたが、これにより同紙を支持・支援していた存在が明らかになり、メディアとしての機能と広がりをも把握することができたと思われる。ここにおいて同紙は、その言論活動の展開(紙面の提供や会合の報



第2図 『銚水会報』第1号(昭和14年7月20日発行)
(越川行雄氏所蔵)

告)により、銚子と周辺地域を、さらには地元名士と在京出身者をつなぐ地域架橋的な役割を果たしていたのである。これらの事実を踏まえ、同紙がいかなる言論を展開していたのか、その特質を抽出していくこととしよう。

Ⅳ 言論の特質

『極東新聞』の言論の特質として第一に挙げられるのは、一貫した政治批判の展開である。同紙の紙面構成を見ると、全4面のうち、おもに銚子周辺地域の政治、経済に関わる記事が1面トップを飾り、「極東時評」「放送塔」と題する評論欄が時事を論じている。続く2面には、主筆越川自ら日本各地へと取材旅行に出掛けた際の紀行文などがあり、3面には、社会風俗的な地域情報が取り上げられ、政治家の艶聞や有力資本家の乱行などから「極東詩歌壇」や地域の歴史、文化を特集した記事までが掲載されている。そして、4面には、前章で見た「地方版」が設けられ、各地の政治情勢、生活状況などを伝えている。

創刊当初、同紙がヤマサやヒゲタなど「銚子の財ばつ」に筆誅を加えていたことはすでに述べたが、その矛先は常に権力の不当な抑圧に向けられ、一度「社会正義」に反すると認識されるならば、たとえ広告主や寄稿者であれ、あらゆる存在が標的とされた感がある。なかでもその批判の眼差しが注がれたのは市制施行間もない銚子市政に対してであった。

昭和9年(1934)1月25日発行の第49号の1面トップには、「市会議員の肩書きを利用し課税引下げに狂奔」との見出しが踊っている。同紙は「真面目な、市民のために尽してゐる市会議員にとって、この記事は迷惑であるかも知れない」と断った上で、市政を自己の利益のために利用する市会議員の存在を非難している。

しかし、ここにおける「この事実が爾後改められないものとするなれば、本紙は次号より市民に代って徹底的な筆誅を加へるであらう事を市民及心当りのある市議諸君に約束する次第である」と

の警告がその後の市政において反映されることはなかった。

同年6月25日の第59号1面には「洗されたる銚子市政」と題する記事が掲げられ、特別税戸数割賦課をめぐる問題が取り上げられている。特別税戸数割とは、銚子市の誕生に際し、市制施行後に市民の負担が増加されることを防ぐために、賦課金額が旧四ヶ村の税金の総和以上にならないことを約した取り決めで、銚子市を新興都市として生み出す市民的原動力となったといわれるものであった³⁶⁾。だが、その実態は一部の有力な市会議員たちが「自己、親戚及び自分の選挙運動者の負担を減して、食ふや食はずの貧乏な市民の肩へ過重な負担を転嫁した」ものとなっていた。西銚子松本区域および本城区域における具体的な賦課数値の提示により、「自己を減額、市民に増額」する「市議のインチキ」が暴露され、そこから「全市民は嚴重に腐敗せる市会を監視すべき」との訴えがなされたのである。こうした市政への批判は、地元人士に市政改革の構想を語らせる「僕がもし市長だったら」という大胆な連載企画をはじめ、以後も、市議会の視察や市会議員の紹介などの形で展開されていく³⁷⁾。

権力の不正・腐敗を糾弾する同紙の言論は、必然、そのために不当な抑圧を強いられていた政治的、社会的弱者の立場を代弁するものとなる。銚子市役所吏員の苛酷な労働状況を記したルポルタージュや成田鉄道株式会社のスト決行の報道などがその典型的な例である³⁸⁾。成鉄バス従業員によるストライキは、昭和12年(1937)3月4日、旭町営業所の従業員26名が賃金値上げや労働時間の削減など、労働条件の改正、待遇の改善を求めて決行したもので、その余燼はすぐに佐原、銚子、成東、小見川の全営業所の運転手、修繕工、車掌たちに広がり、東京交通労働組合の指導のもと、統制のとれた労働争議がなされたという。当時、こうした労働争議は全国各地で発生していたが、ここでは『極東新聞』の言論がストを決行した労働者の側に立つものであったことを確認しておきたい。

このように権力の不当な抑圧と社会的弱者の救済に向けられる同紙の「批判」的な言論を支えていたのは、主筆越川芳麿を援助、時には指導する人々の存在であった。上述した齋藤、明石の2人は、当初、実質的な指導者であったという点で大きな存在であるが、彼らが去った後、同紙の言論に力があったと考えられるのが、鈴木文史朗、吉植庄亮、水野葉舟、尾崎行雄らである³⁹⁾。

鈴木文史朗は、明治23年(1890)銚子小川町生まれ、東京外国語学校出身のジャーナリストで、当時、『東京朝日新聞』取締役、同社出版局長を勤め、外報部特派員上りの海外通として政府の戦争政策に批判的な姿勢を示していた。昭和14年(1939)5月に銚子學堂会の発起人になるなど芳麿と行動をともし、太平洋戦争勃発に際する一斉検挙で芳麿が逮捕された、いわゆる「野田事件」においては終始無実を訴え、出獄に尽力した。吉植庄亮は政友会代議士として著名で、芳麿に尾崎行雄を紹介した人物であった。水野葉舟に関しては、おもに文学的な側面における影響を指摘することができる。明治以来の文学者である葉舟は詩や小説をよくし、房総歌話会に迎えられ、詩歌の指導に当たるなかで、芳麿との親交を深めたようである。

そして、最後に尾崎行雄である。芳麿が尾崎に初めて会ったのは、昭和13年(1938)のことであるが、彼はそれ以前から尾崎の著書や記事に接していた。芳麿の回想によれば、彼がはじめて尾崎の政治的見解に感銘を受けたのは、大正14年(1925)刊行の『政治読本』(日本評論社)を読んだ時であったというから、芳麿が19才、あるいはそれ以降、公正学院在学中のことであろうか。以来、芳麿は尾崎に傾倒し、知遇を得てからは、ほとんど私淑ともいべき関係を築いていく。銚子學堂会の結成に当たり、『極東新聞』の紙面を惜しげもなく提供し、同会の発展に尽くしたのも芳麿にとっては至極当然のことで、戦後、昭和23年(1948)5月に尾崎の来銚を「思罨庵」と称する別荘を建てて迎えたのを見ても、その傾倒ぶりの強さが窺われる⁴⁰⁾。

また同時に、同紙に多くの文章を寄せている松本昌夫をはじめ、地元人士の加瀬道之助、川村芳次、西村文則、松井簡治、臼井大翼などの存在も忘れてはならない。これらの人々との協力と指導のもと、創刊以来、同紙はその「批判」の筆を折ることなく言論活動を展開し、そこから地域住民の信頼を獲得していったのである。

さらに昭和11年(1936)頃を境とし、同紙には、布施辰治、安部磯雄、田川大吉郎、青野季吉、水野弘徳、大宅壮一、向坂逸郎、尾崎行雄などが姿を現すようになる⁴¹⁾。社会派弁護士、社会主義者、自由主義ジャーナリスト、プロレタリア文学運動家、反戦平和主義の軍人、そして「憲政の神様」などによる寄稿および記事の掲載から同紙の言論の特質が窺い知れよう。

なかでも青野季吉と大宅壮一については、昭和11年(1936)1月25日発行の第86号から1面下段に「勤労者・インテリの共同戦線上の友」と題して、同社で週刊『時局新聞』の取扱いを開始したという広告が大きく掲載されていることに注目しなければならない⁴²⁾。広告記事には、「時局新聞の意義」と題して、「週刊、時局新聞は、今日の勤労大衆、インテリゲンチヤにとっては、すでに、かけがへのないものとなつてゐる」との指摘がなされ、「我々は財閥の御用機関として極度に腐敗し、無氣力化した既成大新聞に対して(1)直接配布網を持ち、不当な圧迫と戦ひ得る新聞(2)主要収入源を読者の支持に仰ぎ、生産コストのかさばらない新聞(3)既成ブル新聞に出ない時局の真相を大衆の立場において批判し得る新聞(4)一般新聞社の内情を報告し、新聞のデマをアバキ得る新聞として立ってゐるのだ」との力強い宣言が表明されている。当該期における『極東新聞』が、「共同戦線」を表明する青野や大宅たちに紙面および販売取扱いの場を提供し、中央論壇と地方論壇とを架橋する仲介的な役割を果たしていたことがわかる。

『極東新聞』は、創刊当初から終刊に至るまで政治権力の腐敗に対する糾弾と社会的弱者の立場を代弁する記事を掲載し、一貫して政治「批判」

を展開していくが、それは郷土銚子を愛し、その正しい発展を願うがゆえの批判であった。ここで、こうした政治批判とともに、同紙に掲載されている銚子周辺地域の生活、歴史、文化を取り上げた多種多様な記事に目を向けよう。同紙の言論の特質を位置づけるならば、政治批判の展開が地域文化の発展を期した記事の掲載とともに試みられていたことを看過してはならないだろう。

銚子周辺地域の生活に関連し、同紙の紙面を賑わせたのが、「銚子商港」化をめぐる一連の記事であった。昭和初期における銚子市の存立にとって銚子商港の実現は念願であり、大きな課題であった⁴³⁾。市制施行以来、漁港修築工事の難航、水揚げ高の減少、また周辺地域の開発の進行などが重なるなかで、商港運動が起こっていた。第114号（昭和12年4月20日）「踏み出した商港銚子」は利根本流の改修をめざす内務省案に、現状打破の期待を寄せる記事であり、郷土銚子の発展を願う同紙の姿勢を示すものといえる。

その一方で、郷土銚子の歴史を探訪、記録する記事も少なくない。紙面掲載の広告によると、昭和9年当時、芳麿は同紙のほかに、「旅と宿」と題する旅行雑誌の発刊を計画していたようで、全国各地への旅行における紀行文ならびに特集記事が多数掲載されている。第56号（昭和9年5月10日）より連載された「人物風土記」や第167号（昭和14年6月30日）以来十数回に及ぶ「資料郷土史研究」などはその代表的なものである。小林秀雄により「郷土の喪失」が語られ、戦時体制の進行に伴う「郷土回帰」的な時代風潮のなかにおいて、郷土銚子のあり方を改めて位置づけようとする意欲が色濃く表出されている⁴⁴⁾。また、地元の商店や病院などの看板娘を紹介し、あるべき女性像の提示を試みる「昭和娘鑑」や「有名・無名婦人訪問記」などの存在も同紙の言論を語る上では興味深い⁴⁵⁾。こうした銚子の歴史や生活を取り上げた記事は、昭和戦前期における銚子の姿を復元する上で重要な史料であり、「郷土日誌」「半島の十五日間」「房総の十五日間」と題して設けられた日記録などは、当該期における同市の動向を詳

細に伝える史料として注目される。

加えて、同紙は地域文化の発展を期し、自らもその形成に当たっている。「極東詩歌壇」の設置がそれである。同欄は銚子歌話会などの地元の詩会、歌会の会員の詠草を掲載する場として用いられ、いわば詩歌同人の言論空間であり、芳麿自身も自らの政治的主張や批判精神、あるいは郷土や家族への思いを込めて詩歌を掲げている。ここにおける創作活動は、房総歌話会という同人組織の結成を促す。房総歌話会は、昭和13年（1938）11月29日、午後4時より公正会館応接室で開催された銚子歌話会第一回総会の席上において、同会を解消、新たに水野葉舟、吉植庄亮など、郷土と関係のある歌壇の先輩に協力を求めて創立された歌会である⁴⁶⁾。同会は、新年歌会や月例会を催し、その成果を『極東新聞』に「房総歌話会員詠草」と題して掲載するとともに、昭和14年3月25日には、海鹿島仙松閣に、当時、文芸誌『霸王樹』を主宰していた白井大翼を迎えて歌会を開催するなど、創作活動を通じて、在京県人との交流を行っていた⁴⁷⁾。また、房総歌話会は、上述した銚水会や三水会とともに、以後、同紙ならびに後継誌を支える存在となっていくのであった。

以上見てきたように、「極東新聞」の言論の特質は、終始一貫した政治批判の展開と地域文化の発展を同時並行的に説くところに置かれていた。芳麿自身、そうした同紙のあり方について、創刊10周年を迎えた昭和14年（1939）5月30日の第165号において「地方新聞存在意義の重要な一つは郷土色である。極東新聞はその意義を最も徹底するため郷土出身の在京諸先輩に乞ひ、出来るだけ郷土に対する御意見を発表していたゞくと共に一面郷土のことを在京諸先輩に出来るだけ知っていたゞき、郷土をあらゆる角度からよりよくすることに努力を注いでゐる。これは県下如何なる新聞も未だかつて試みないことで極東新聞の些か誇り得る方針といへるであらう」と述べている⁴⁸⁾。では、同紙の言論は、当時、どのような形で受け止められていたのであろうか。同紙に度々記事を寄せている加瀬道之助の文章によってその一端を

垣間見ることとしよう。

越川君の『極東』紙は、事実の速報と云ふよりは、多分に、意見の主張に力を入れて居るかに見える。

他の新聞が、ニウスバリウなしとして、棄てて行ったであろう様な、一の事件を通して必ず極東は、其に一の主張を加味して以て、読者に訴へんとする主義を持って居るかに見える。

他の新聞が、所謂『見られる新聞』を出して居る間に、越川君は、一人で『読まれる新聞』を創って居るではあるまいか⁴⁹⁾。

『極東新聞』100号記念に際し、加瀬は「百号は百戦の印」と題する祝辞を寄せて、同紙の存在を、「機械的大量生産品の陳列」のごとき中央紙に比して、「丹念に、手工で作上げた郷土芸術品」であると表現している。そして、「極東紙を見て感じる事は、全面を通して、弱い者への味方、大衆生活の擁護と云ふ所謂『社会正義』と云ふ一の主張が、脈々と躍動する事であろう」と同紙の言論の本質を捉え、その「社会正義感」のゆえに「一号一戦」を余儀なくされるであろう道程に対して、「所謂『正しい社会観』の下に、堂々と難路通過さるべきを切望する」と述べている。さらに、第166号（昭和14年6月20日）1面において、加瀬は創刊10周年の祝辞として「愛される新聞」を寄稿している。百号発行時において『読まれる新聞』であった『極東新聞』が、その一貫した言論活動を通じて、銚子出身の在京者により愛好され、支持を受ける新聞となり、地域文化の発展に少なからず資するものへと成長したと評価されている。

極東紙は越川君其ものであり、越川君は極東紙を通じて其人為りを示して居る。二者一体である。だから明朗、清浄、正義感と云ふ気分が紙上全面に溢れて居るのは越川君の持つ青年らしい若々しさと共に越川君の人為りが、紙上に投影されて居るのである。故に越川君は好く先輩

に愛されると同様に、極東紙は亦先輩に愛好される。三水会、銚子会、銚子学堂会の人々も皆極東紙を愛し越川君を後援する有力者である。越川君のやうに、郷土の先輩に愛される者は無からうと思ふ。

其所に極東紙の強みもあり、其所に到達した理由に越川君の青年らしい純潔と詩人らしい情熱が潜んで居る訳である。

V おわりに

本稿では、昭和戦前期において銚子の地に根差し発行された『極東新聞』と主筆越川芳麿について考察を加えてきた。『極東新聞』は、時代閉塞のただなかにありながらも、地元の広告主や在京県人に支えられる形で、終始一貫、「社会正義」を標榜し、独自の言論活動を展開した。政治権力の腐敗を糾弾し、社会的弱者の救済を求めると同時に、銚子周辺の生活、歴史、文化などを取り上げた多様な記事を掲載するなかで、地域内を架橋する役割を果たし、地域文化の発展に資する存在へと成長していったのである。同紙および越川芳麿の「批判力」は、中央紙ならびに地方紙の多くが政治権力と時代の前にその筆を屈していくなかであって、特筆に値するものであったといえよう。

さて、『極東新聞』には、紙名を異にする二つの第199号が存在している。一つは、文芸誌『極東』において、もう一つは、戦後に発刊された『東日本新聞』においてである。『極東新聞』は、昭和15年（1940）10月30日、大政翼賛体制のもとで行なわれた一県一紙政策による『千葉新報』の創刊に当たり、昭和5年1月5日の創刊以来、約10年9ヶ月に及ぶその歴史に幕を降ろし、終刊を余儀なくされた⁵⁰⁾。主筆越川芳麿は、『千葉新報』の野田支局長を命ぜられ、銚子から移転し、その任に就くこととなる⁵¹⁾。ここにおいて『極東新聞』の後継誌として創刊されたのが文芸誌『極東』である⁵²⁾。昭和15年12月30日、『極東新聞』終刊からわずか2ヶ月での再出発であった。翌年2

月30日発行の第2号から『郷土』と改題した同誌は、文字通り、詩や短歌などの創作活動を通じて、郷土銚子の文化の発展に貢献しようと試みようとした。

しかし、その活動も、昭和16年(1941)12月9日未明、太平洋戦争の開戦直後に行なわれた国内における共産主義者の一斉検挙のなかで、越川芳麿が赴任先である野田の地で逮捕・入獄されたことにより大きな打撃を受けることとなる。後年、芳麿自身、その逮捕・入獄の経緯を「野田事件」として語っているが、ここにおける政治権力の暴発、不当な扱いは戦後の彼の言論活動を大きく規定するものとなっていく⁵³⁾。

芳麿は、鈴木文史朗らの助力により出獄を許された後、終戦まで静かな生活を続けていたが、終戦を迎えるや一転して新聞の再刊に奔走した。庭先に埋めておいた活字を掘り起こし、戦時中に蓄

えておいた紙を用いて、終戦後まだ半年も経たない昭和21年(1946)1月25日に『東日本新聞』を創刊するに至ったのである⁵⁴⁾(第3図)。「東日本新聞」紙上において、彼はこれまで政治権力の不当な抑圧により押さえ込まれていた言論の自由を存分に解放し、戦前にもまして「社会正義」の筆誅を揮っていく。『極東新聞』時代の後援者に加え、尾崎行雄や戦時中に銚子犬若へ疎開していたジャーナリスト茅原華山などの協力もあり、『東日本新聞』は戦後の銚子において独特の言論を展開していくのである⁵⁵⁾。ここにおける言論活動はさらなる支持者、支援者を生み出し、昭和57年(1982)2月18日に芳麿が死去した後も、同紙の発行を約五年にわたり維持・継続させる礎となるのであるが、戦後における『東日本新聞』と越川芳麿についてはいずれ別稿にて改めて論じることとしたい。



第3図 『東日本新聞』第199号(1946年1月25日発行)
(越川行雄氏所蔵)

付 記

本報告を作成するにあたり、越川ヤスさん・行雄氏には貴重な諸史料の提供をはじめ、幾度かの聞き取り調査を通じて、多くのご教示とご協力をいただきました。お二人の敬愛の念と不断の努力によって、芳麿が長年にわたり集めた膨大な史料・遺物・美術品・骨董類などは、現在、海鹿島の「思岑庵美術館」において保存・管理されており、銚子の歴史や文化を知る上で格好の素材となると思われます。また、銚子市公正図書館主任主事高森良文氏には、『極東新聞』の複製ならびに資料収集の際に大変お世話になりました。記して厚くお礼申し上げます。

注および参考文献

- 1) 『極東新聞』および『東日本新聞』については、越川芳麿の次男行雄氏所蔵の本紙、および銚子公正図書館所蔵の複製版を用いた。以降、『極東新聞』の記事論説に関しては、紙名を省略して記載する。
- 2) ①伊藤隆(1983)：『昭和期の政治』，山川出版社。
②筒井清忠(1996)：『昭和期日本の構造—二・二六事件とその時代—』，講談社学術文庫版。
③北岡伸一(1999)：『<日本の近代5> 政党から軍部へ』，中央公論新社。

- 3) ①有山輝雄 (2000) : 1930年40年体制と言論の多様性, マス・コミュニケーション研究第56号, 50~63。②奥武則 (2000) : 『大衆新聞と国民国家—人気投票・慈善・スキャンダル—』, 平凡社選書。③門奈直樹 (2001) : 『民衆ジャーナリズムの歴史—自由民権から占領下沖縄まで—』, 講談社学術文庫版。また, 高崎隆治 (1976) : 『戦時下の雑誌—その光と影—』, 風媒社。丸山尚 (1985) : 『ミニコミ戦後史—ジャーナリズムの原点をもとめて—』, 三一書房は, 戦中・戦後の雑誌および地方新聞を対象とし, その存在意義を明らかにしようとする試みとして示唆に富んでいる。
- 4) 無論, そのようななかにあっても『信濃毎日新聞』の主筆桐生悠々や『福岡日日新聞』の福竹六鼓のように, 政治権力や時代と言論をもって闘い続けたジャーナリストも存在した。
- 5) 越川芳麿の略歴については, 妻越川ヤスさん・次男行雄さんからの聞き取り, 「芳麿自筆の履歴書」(越川行雄氏所蔵「越川芳麿ファイル①」)所収, 『東日本新聞』における回想記事などを参考にした。
- 6) ①銚子市史編纂委員会編・発行 (1956) : 『銚子市史』, 664~677。②銚子市編・発行 (1983) : 『続銚子市Ⅱ 昭和後期』, 604~674。③手打明敏 (1981) : 大正末・昭和初期における民間社会教育事業に関する考察—千葉県銚子地域における「公正会」の社会教育事業について—, 淑徳大学研究紀要第15号, 33~48。
- 7) 越川清「純情越川君」(『東日本新聞』843号, 1965年2月5日) 3面。記事の署名から, この時期, 氏が八日市場市教育長を務めていたことがわかる。
- 8) 『銚子評論』に関しては, 銚子公正図書館所蔵のものを参照した。
- 9) こシカワよシマロ「新聞36周年の回顧 (36) 生い立ち④」(『東日本新聞』910号, 1966年12月15日) 4面。
- 10) 文芸誌『極東詩人』については未見。
- 11) 前掲, 5)「芳麿自筆の履歴書」の記載による。
- 12) 越川行雄氏所蔵「越川芳麿ファイル②」所収, 「銚子地方新聞秘史」(記載内容から昭和25年執筆と推定される)には, 「思うに筆者の家は特高警察により前後三回に亘り家宅ソウサを受けており, そのたび毎に極東新聞は思想的な証こ物件として持ち去られ, 且つその繁にたえず自ら焼却したりした」との記述がなされている。
- 13) ①加瀬俊雄 (1956) : 千葉県新聞史, 日本新聞協会編『地方別日本新聞史』, 日本新聞協会, 103~110。②千葉県編 (1967) : 『千葉県史 大正昭和編』, 千葉県, 130~144。
- 14) 『大衆日報』は昭和8年 (1933) 創刊。同12年2月から日刊紙となった同紙は, 現在に至るまで発行を継続している。『日刊魁新聞』は同8年10月創刊の隔日刊新聞。『銚子毎日新聞』は同9年8月の創刊である。
- 15) こシカワよシマロ「新聞36周年の回顧 (37) 生い立ち⑤」(『東日本新聞』913号, 1967年1月15日) 6面。
- 16) 斎藤秀雄「創刊四十周年を迎え」(『東日本新聞』1037号, 1970年6月25日) 1面。
- 17) こシカワよシマロ「新聞37周年の回顧 (40) 生い立ち⑧」(『東日本新聞』917号, 1967年2月25日) 4面。
- 18) 越川行雄氏所蔵「越川芳麿ファイル①」所収, 「『極東新聞』認可証」。
- 19) こシカワよシマロ「新聞37周年の回顧 (39) 生い立ち⑦」(『東日本新聞』916号, 1967年2月15日) 4面。
- 20) 前掲, 斎藤秀雄「創刊四十周年を迎え」。
- 21) 前掲, こシカワよシマロ「新聞37周年の回顧 (39) 生い立ち⑦」。
- 22) 前掲6), ①, ②。
- 23) 芳麿の筆禍・下獄は紙面から二度確認される。一度目は, 52号 (昭和9年3月1日) 1面下段の「御挨拶」ならびに55号 (同年4月25日) 1面下段の「御挨拶」の記述から, 同年3月1日から4月17日までの約1ヶ月半であったことがわかる。また, 二度目は, 78号 (昭和10年5月10日) 1面の記載により, 同年4月から10月までの約9ヶ月間であったことが判明する。
- 24) 前掲, こシカワよシマロ「新聞37周年の回顧 (39) 生い立ち⑦」。
- 25) 郵送による配達は, 戦後における『東日本新聞』においても継続されていたという。その配達網がわかれば, 同紙の購読者の分布を知る上で重要な手掛かりになると思われるのであるが, そうした資料はいまだ確認できていない。
- 26) 「東京新聞紙の市内販売部数」(88号, 昭和11年2月25日) 2面。
- 27) 秋山, 岩井阿氏の経歴については, 「銚子市在住名医紹介」(一) (105号, 昭和11年11月20日) 3面, および(八) (120号, 昭和12年7月20日) 2面を参照。
- 28) 青木栄一 (1973) : 房総地方における鉄道網の形成とその問題点—房総地方鉄道史序説—, 地方史研究協議会編『房総地方の歴史』, 雄山閣出版, 315~338。青木氏の研究によると, 大正10年~昭和15年は, 房総地方における鉄道建設の第三期に当たり, 「東京の都市化の影響が現われ, また房総半島一周

- 線の完成、利根川流域への鉄道網の拡大、国鉄線の支線となる鉄道網の充実などが行なわれた」という。
- 29) 「創刊十周年を迎えへて」(165号, 昭和14年5月30日)1面。
- 30) こうした宣言を受ける形で、同紙では次号より題字下の文字が、それまでの「本紙は千葉県及び東京南部の太陽である」から「本紙は千葉県及東京南部の太陽である」へと変更されるなど、東京進出にける期待が色濃く顯れている。
- 31) 「郷土出身 中央に活躍する人々」(132号, 昭和13年1月20日)3面。この記事は「在京県人版」の新設と同時に連載開始、以後、隔号に掲載された。
- 32) 「滑川氏等発起人承諾 銚子人会々発会式」(153号, 昭和13年1月30日)3面。
- 33) 銚水会の結成報告は、「郷土愛中心の社交機関」銚水会設立趣意決定」(157号, 昭和14年1月30日)3面に詳しい。反響については、「銚水会申込み相次ぎ当番世話人大に感激」(158号, 昭和14年2月20日)3面。
- 34) 「銚水会春季例会開催」(181号, 昭和15年1月30日)2面をはじめ、同会に関する記事は多数掲載されている。
- 35) 『銚水会報』創刊号(編輯印刷兼発行人 滑川真平, 印刷所 極東新聞社印刷部, 昭和14年7月20日)。編輯印刷兼発行人は滑川の名前になっているが、実質的に同誌の編集に当たっていたのは芳磨であった。創刊号の「編輯後紀」には、「而しさうした技術的な問題は兎に角、執筆者の顔ぶれ及その内容からいって、この小冊子は永遠に銚子市の一大資料たることを失はぬであらう。こゝに謹みて御多忙中を本誌のため、御執筆下さった諸先生方に感謝する次第である(越川生)」との記述がある。
- 36) ①前掲、『銚子市史』, 776~796。②銚子市編(1983):『続銚子市 I 昭和前期』, 銚子市, 189~274。
- 37) 「僕がもし市長だったら」(55号, 昭和9年4月25日)より連載、「銚子市議三十の横顔」(90号, 昭和11年3月30日)より連載。
- 38) 「酷使十四時間 銚子市役所吏員悲鳴」(58号, 昭和9年6月10日)3面。「成鉄バス従業員は何故立ち上ったか」(112号, 昭和12年3月20日)1面。
- 39) 鈴木文史朗, 吉植庄亮については『銚水会報』附録の「会員名簿」を参照。水野葉舟に関しては、水野葉舟ほか著, 吉田精一編(1969):『明治文学全集72』, 筑摩書房。
- 40) こシカワよシマロ「新聞38周年の回顧(62) 銚子号堂会(1)」(『東日本新聞』956号, 1968年3月25日)より連載。
- 41) これらの記事の内には、当時の言論統制により影響を受けたものも含まれている。例えば、第129号(昭和12年11月30日)の水野広徳「日本人と攻撃精神」などは同月20日発行の『日本学芸新聞』に掲載された論説であった。
- 42) 編輯顧問には、秋田雨雀, 青野季吉, 赤神良讓, 早坂二郎, 貴司山治, 新居格, 野崎龍七, 大宅壮一, 戸坂潤の名前が列記されている。
- 43) 前掲, 『続銚子市 I 昭和前期』, 149~176。
- 44) 小林秀雄「(文芸時評) 故郷を失った文学」(『文芸春秋』第11年第5号, 昭和8年5月)184~190。
- 45) 「昭和娘鑑」は「美人」「処女」「聡明」「模範」を条件とし、「鑑」となる女性を探し、写真付きで記事を掲載しており、当時の女性像を捉える上で興味深い資料といえる。49号(昭和9年1月25日)において「その二」となっており、以後、確認できる限りで5回にわたり掲載されている。
- 46) 「房総歌話会創立」(153号, 昭和13年11月20日)2面。
- 47) 「臼井先生来銚」(160号, 昭和14年3月20日)2面。
- 48) 前掲, 「創刊十周年を迎えへて」。
- 49) 加瀬道之助「百号は百戦の印」(100号, 昭和11年8月30日)1面。
- 50) 198号(昭和15年10月30日)は「終刊号」と題され、同紙の支援者が多くの寄稿をよせている。
- 51) 越川行雄氏所蔵「越川芳磨ファイル①」所収, 「『千葉新報社』よりの辞令」。
- 52) 文芸誌『極東』は、2号より『郷土』と改題、22号(昭和18年7月30日発行)まで続刊された。
- 53) こシカワよシマロ「新聞35周年の回顧(1) 野田事件①」(『東日本新聞』843号, 1965年2月5日)4面。以後、連載は計33回に及んだ。
- 54) 『東日本新聞』に関しては、越川行雄氏所蔵および銚子市公正図書館所蔵のものを用いた。
- 55) 戦争中に犬若に疎開していた茅原は戦後、同紙に協力。昭和22年(1947)8月には、東日本新聞社出版局から『生活の書』と題する著書を刊行している。

第1表 【極東新聞】発行内容一覧

号数	発行年月日	発行数	発行日	頁数	値段(銭)	地方版	特記事項(一面記事ほか)
号外	昭和7年9月26日	月刊	15日	2	10		銚子座の不正建築
49	昭和9年1月25日	半月刊	10日25日	2	10		市会議員、課税引下げに奔走
50	2月10日	〃	〃	4	10	水	内務省の利根大商港案、[水郷版]
51	2月25日	〃	〃	2	10		観光銚子に一大光明
52	3月10日	〃	〃	4	10	水	巻き起る銚子商港運動!
53	欠号	—	—	—	—	—	
54	欠号	—	—	—	—	—	
55	4月25日	半月刊	10日25日	2	10		銚子の漁業よ何処へ行く
56	5月10日	〃	〃	4	10	水	千葉県議の成鉄渠金不払問題
57	5月25日	〃	〃	2	10		銚子市・失政二題
58	6月10日	〃	〃	4	10	水	県民グラウンド寄附金強要
59	6月25日	〃	〃	2	10		流されたる銚子市政
60	7月10日	〃	〃	4	10	水	第一期戸数割における英断
61	7月25日	〃	〃	2	10		破壊された大吠の風景
62	8月10日	〃	〃	4	10	水	虫歯予防宣伝映画の妨害
63	8月25日	〃	〃	2	10		遊興税徴収に警察官を使用
64	9月10日	〃	〃	4	10	水	増税反対(民政党の進言批判)
65	9月25日	〃	〃	4	10	水	内務省の銚子大商港案(一)
66	10月10日	〃	〃	4	10	水	内務省銚子商港案、議会提出へ
67	10月25日	〃	〃	2	10		成田不動産の利目に疑惑
68	11月10日	〃	〃	4	10	水	成田山新勝寺に大異変
69	11月25日	〃	〃	4	10		県会議員の赤字予算満州視察
70	12月10日	〃	〃	4	10	水	野田財閥濶愆の声
71	12月25日	〃	〃	4	10	水	北海道の大凶作
72	昭和10年1月10日	〃	〃	4	10		一九三五年来る
73	1月25日	〃	〃	4	10	水	銚子市役所インチキ賞与問題
74	欠号	—	—	—	—	—	
75	欠号	—	—	—	—	—	
76	3月10日	月刊	10日	2	10	水	水郷特報版(※76~84)
77	4月10日	〃	〃	2	10	水	満州国皇帝陛下御来訪を祝ひて
78	5月10日	〃	〃	2	10	水	小見川水門開通
79	7月5日	〃	5日	2	10	水	東大戸小学校講堂落成式
80	8月5日	〃	〃	4	10	水	新佐原小唄発表
81	9月20日	〃	20日	2	10	水	新曲「佐原小唄」決定
82	欠号	—	—	—	—	—	
83	11月20日	月刊	20日	2	10	水	佐原町会の醜態
84	12月20日	〃	〃	2	10	水	萩原翁の軍事上の功績
85	欠号	—	—	—	—	—	
86	昭和11年1月25日	半月刊	20日25日	2	20		銚子の就職戦線異状なし
87	2月20日	〃	〃	4	20	水	銚子商港の実現に
88	2月25日	〃	〃	4	20		千葉県電灯企業問題(川崎財閥)
89	3月20日	〃	〃	4	20	水	地方文化の殿堂公正会館十周年
90	3月30日	〃	20日30日	4	20		銚子市議三十の横顔
91	4月20日	〃	〃	4	20	水	千葉県自動車協会の動向
92	4月30日	〃	〃	4	20	水	健康保険医の不当利得
93	5月20日	〃	〃	4	20	水	佐藤尚中翁の事績
94	5月30日	〃	〃	4	20		給料踏み倒しで昭和漁業訴へらる
95	6月20日	〃	〃	4	20	水	完備した銚子東校の給食設備
96	6月30日	〃	〃	4	20	水	臼井大潤先生来銚
97	7月20日	〃	〃	4	20	水	銚子市政の検討(水道計画)
98	7月30日	〃	〃	4	20	水	萩原甲太郎翁の二代計画
99	8月20日	〃	〃	4	20		銚子戸数割の不公平
100	8月30日	〃	〃	4	20	水	本紙百号を祝する各方面の辞
101	9月30日(20日?)	〃	〃	4	20	都南	〔東京都南評論版〕新設
102	9月30日	〃	〃	4	20		「漁業」水産国策漫語
103	10月20日	〃	〃	4	20	水	義務教育八年制の是非を識者に聴く
104	10月30日	〃	〃	4	20	水	完成近いヤマサ、ヒゲタの新醸造法
105	11月20日	〃	〃	4	20	水	利根治水協会に就て
106	11月30日	〃	〃	4	20	水	郷土銚子市の誇り岡田幸三郎氏小伝

107	欠号	-	-	-	-	-	
108	昭和12年1月20日	半月刊	20日30日	4	20	水	年頭所感(松井・白井・岩瀬)
109	昭和12年1月30日	〃	〃	4	20	水	市会の明朗化へ期待(新人候補続々)
110	2月20日	〃	〃	4	20	水	困難な電気値下運動
111	2月28日	〃	〃	4	20		千葉県会報告書
112	3月20日	〃	〃	4	20	水	成鉄バス従業員は何故立ち上ったか
113	3月30日	〃	〃	4	20	水	次期市長も川村芳次氏が決定的
114	4月20日	〃	〃	6	20	水	商港銚子、内務省案実現運動着手
115	欠号	-	-	-	-	-	
116	5月20日	半月刊	20日30日	4	20		銚子市次の飛躍へ!川村氏市長再選
117	5月30日	〃	〃	4	20	水	県水産会社市営論
118	6月20日	〃	〃	2	20		田中玄蕃翁に贈く(一)
119	6月30日	〃	〃	4	20	水	犬吠へ蘆花の碑と文人画家ホテル計画
120	7月20日	〃	〃	4	20	水	読売新聞のデマ放送
121	7月30日	〃	〃	4	20	水・山	特輯 仙境・君ヶ浜の散策,〔山西版〕
122	8月20日	〃	〃	4	20	水・山	(寄稿)北支事変と新聞
123	8月30日	〃	〃	4	20	水・山	※田川大吉郎,青野季吉,布施辰治寄稿
124	9月20日	〃	〃	4	20	水・山	(寄稿)銚後を守る公民大衆の時局常識
125	9月30日	〃	〃	4	20	水・山	※最新式印刷機を購入(印刷部の躍進)
126	欠号	-	-	-	-	-	
127	欠号	-	-	-	-	-	
128	11月20日	半月刊	20日30日	4	20	水・山	青野季吉「支那と自治」
129	11月30日	〃	〃	4	20	水・山	水野広徳「日本人と攻撃精神」
130	12月20日	〃	〃	4	20	水・山	田中惣五郎「文化の宣伝」
131	12月30日	〃	〃	4	20	水・山	布施辰治「日支を結ぶ農民の魂」
132	昭和13年1月20日	〃	〃	4	20	水・京	岩井弘行「時感二つ」,〔在京県入版〕
133	1月30日	〃	〃	4	20	水	布施辰治「支那の農民と戦争」
134	2月20日	〃	〃	4	20	水・京	鈴木文史朗「銚子人と新中学校」
135	2月28日	〃	〃	4	20	水・葛	加瀬道之助「市政小言」,〔東葛版〕
136	3月20日	〃	〃	4	20	水・京・葛	仲内憲治「皇軍聖戦の跡を訪ねて(一)」
137	3月30日	〃	〃	4	20	水・葛	松井簡治博士談「商港時代の銚子」
138	4月20日	〃	〃	4	20	水・京・葛	魔の銚子川口は何時解消するのか
139	4月30日	〃	〃	4	20	水	銚子市漁業の将来
140	5月20日	〃	〃	4	20	水・京	尾崎行雄の論説掲載
141	5月30日	〃	〃	4	20	水	松井簡治博士「大日本国語辞典」編纂
142	6月20日	〃	〃	4	20	水・京	思想問題座談会「日本人に立ち返れ!」
143	6月30日	〃	〃	4	20	水	田中玄蕃家記録「水戸斉昭の水郷視察」
144	7月20日	〃	〃	4	20	水・京	市内各校夏期計画
145	7月30日	〃	〃	4	20	水	西村文則「国境」
146	8月20日	〃	〃	4	20	水・京	大宅社一「大陸の旅日記より」
147	8月30日	〃	〃	4	20	水	鈴木文史朗「忠孝と共に世界人類愛」
148	9月20日	〃	〃	4	20	水・京	吉植庄亮「銚後の農村便り」
149	9月30日	〃	〃	4	20	水	白井莊一「滿蒙移民の視察より帰って」
150	10月20日	〃	〃	4	20	水・京	越川芳麿「逗子風雲閣に粵黨翁と語る」
151	10月30日	〃	〃	4	20	水	銚子県議候補者展望
152	11月20日	〃	〃	4	20	水・京	銚子人会近く発会式
153	11月30日	〃	〃	4	20	水・京	房総歌和会創立
154	12月20日	〃	〃	4	20	水・京	十三年度郷土日誌
155	12月30日	〃	〃	2	20	水	千葉農村更正連盟の要請書
156	昭和14年1月20日	〃	〃	4	20	水	吉田松陰先生作「銚子港」の詩
157	1月30日	〃	〃	4	20	水・京	銚水会設立趣意決定
158	2月20日	〃	〃	4	20	水・京	銚水会申込み相次ぎ常番世話人感激
159	2月28日	〃	〃	4	20	水・京	銚子漁業発展策座談会
160	3月20日	〃	〃	4	20	水	史蹟保存法指定の榎陵翁の事跡
161	3月30日	〃	〃	4	20	水・京	第七回議会における吉植代議士の活躍
162	4月20日	〃	〃	4	20	水・京	加瀬道之助「銚子市政 寄附と学校」
163	欠号	-	-	-	-	-	
164	5月20日	半月刊	20日30日	4	20	水・京	水野葉舟「林間の書齋から」
165	5月30日	〃	〃	4	20	水	祝創刊十周年、銚子聖堂会発会式
166	6月20日	〃	〃	4	20	水・京	銚水会第二回例会決定
167	6月30日	〃	〃	4	20	水・京	銚水会第二回例会「武選長久祈願」
168	7月20日	〃	〃	4	20	水	銚水会銚子で開催、銚子を語る座談会

169	7月30日	〃	〃	4	20	水・京	豪華版「銚水会報」発行
170	8月20日	〃	〃	4	20	水・京	鈴木文史朗「故郷忘れ難し」
171	昭和14年8月30日	半月刊	20日30日	4	20	水・京	極東新聞後援会員申込書より、講演部
172	9月20日	〃	〃	4	20	水・京	欧州大戦争に際し各国首脳部の声明
173	9月30日	〃	〃	4	20	水・京	吉植加藤両氏を中心に有畜農業指導へ
174	10月20日	〃	〃	4	20	水	爆たり！銚子芻堂会
175	10月30日	〃	〃	4	20	水・京	政友会機関紙「政友特報」より
176	11月20日	〃	〃	4	20	水・京	第二期戸数制に見る奇怪な市議の態度
177	11月30日	〃	〃	4	20	水・京	「極東」学芸欄新設
178	12月20日	〃	〃	4	20	水・京	吉植庄亮「農村時言」
179	12月30日	〃	〃	2	20	水	大陸歌だより
180	昭和15年1月20日	〃	〃	4	20	水・京	「極東時評 迎年の言葉」
181	1月30日	〃	〃	2	20	水・京	市民の相言葉 銚子より代議士の選出
182	2月20日	〃	〃	4	20	水・京	「新聞の新聞」斉藤氏の舌禍問題
183	2月29日	〃	〃	2	20	水	「極東時評 選挙違反」
184	3月20日	〃	〃	4	20	水・京	岡田源吉「現下石炭対策私見」
185	3月30日	〃	〃	2	20	水・京	銚子発展策廿二条（東京幸野氏の意見）
186	4月20日	〃	〃	4	20	水・京	「極東時評 名勝の保存」
187	4月30日	〃	〃	2	20	水	鈴木文史朗氏談
188	5月20日	〃	〃	4	20	水・京	本社記者の光栄「尾崎行雄全集」受贈
189	5月30日	〃	〃	2	20		吉植庄亮対談「中国の農村問題」
190	欠号	—	—	—	—	—	
191	6月30日	半月刊	20日30日	2	20		「極東時評 十大偉人伝」
192	7月20日	〃	〃	4	20	水・京	大里市会議長談「漁港修築問題其他」
193	7月30日	〃	〃	2	20	京	「極東時評 愛市中心（山下真一）」
194	8月20日	〃	〃	2	20	水	加瀬道之助「新政治体制と県会の動向」
195	8月30日	〃	〃	4	20	京	※極東時評交互執筆
196	9月20日	〃	〃	4	20	水・京	銚水会員講演速記（臼井大翼）
197	9月30日	〃	〃	2	20		銚水会員講演速記（内田勝司）
198	10月30日	〃	〃	4	20	京	終刊号、「終刊に寄せる辞」

（越川行雄氏所蔵「極東新聞」より作成）

注）「地方版」欄の「水」は水郷版、「都南」は東京都南評論版、「山」は山西版、「葛」は東葛版、「京」は在京東人版を示す。